



TITLE:

Studies on Replacement for the Cervical and Upper Thoracic Esophageal Defects by Free Transplantation of a Gastric or Intestinal Segment(Abstract_要旨)

AUTHOR(S):

Matsui, Hirotoshi

CITATION:

Matsui, Hirotoshi. Studies on Replacement for the Cervical and Upper Thoracic Esophageal Defects by Free Transplantation of a Gastric or Intestinal Segment. 京都大学, 1969, 医学博士

ISSUE DATE:

1969-03-24

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/213064>

RIGHT:

氏 名	松 井 博 俊 まつ い ひろ とし
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	医 博 第 384 号
学位授与の日付	昭 和 44 年 3 月 24 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	医 学 研 究 科 外 科 系 専 攻
学 位 論 文 題 目	Studies on Replacement for the Cervical and Upper Thoracic Esophageal Defects by Free Transplantation of a Gastric or Intestinal Segment (胃腸管完全遊離移植による高位食道欠損補填に関する研究)
論文調査委員	(主 査) 教 授 木 村 忠 司 教 授 伊 藤 鉄 夫 教 授 本 庄 一 夫

論 文 内 容 の 要 旨

頸部または上胸部食道の悪性腫瘍や良性狭窄に対する外科的治療としての食道再建術は、胃腸管の有茎移植、あるいは完全遊離移植によって現在ほぼ目的が達成されている。しかしながらこれらの手術、とくに胃腸管完全遊離移植についてはなお未解決の点が少なくなく、たとえば完全遊離移植片採取後の処理、ことにそれを灌流して脱血する操作が必要であるか否かについてはなお意見の一致をみない現状である。また完全遊離移植の際には血管は再建されるが、神経およびリンパ管は切断されたままであり、このことが移植片におよぼす影響、さらには移植片の採取部位などについても検討の必要がある。

そこで、著者は犬を用いてその大弯側より胃管を作製し、

- 1) ヘパリンが低分子デキストランあるいは生理的食塩水で移植片を灌流し、その還流静脈血の酸素分圧を生理学用ガス分析計で測定した。
- 2) 実験犬で遊離胃管による頸部食道再建を実際に行ない、灌流が手術成績におよぼす影響を検討した。
- 3) 外来自律神経およびリンパ管の切断が遊離胃管の機能におよぼす影響について、有茎胃管群を対照とし、 ^{32}P 局所クリアランス、運動機能、病理組織学的所見を比較検討した。

また、

- 4) 教室における完全遊離腸管による頸部食道再建臨床例の経験を述べた。

これらの実験および手術の結果から、

- 1) ヒスタミンを投与すると、移植片の還流静脈血の酸素分圧は灌流群では20ないし30%の低下を示したが、非灌流群では約5%の変化をみたにすぎなかった。このことは灌流が手術操作などによって開存している A-V anastomosis をその状態で継続せしめることを示している。
- 2) 実験犬における頸部食道再建では、灌流の影響はみられず、血行再建は器械吻合で確実に成功し、比較的好成績が得られた。

3) ^{32}P 局所クリアランスは移植後3カ月までは遊離移植群で高い値を示したが、6カ月以上経過すると有茎移植群との間に差はみられなかった。

4) 移植片の内圧曲線では、移植後3週では有茎移植群に定型的な蠕動運動を認めたが、ワゴスチグミンには両群共によく反応した。3カ月を経過すると両群の間に差はなくなった。

5) 臨床例において完全遊離腸管による頸部食道再建6例を経験し、2例に長期生存を得た。とくにそのうちの1例は若年者の頸部食道狭窄例で、血行再建は器械吻合で全く容易であり、術後の結果も良好であった。

すなわち、

1) 移植片採取後短時間で血行再建が可能な自家移植では灌流はむしろ有害無益である。

2) 完全遊離移植胃管は長期を経過すれば、その機能において有茎移植胃管と同様の態度をとり、代用食道としての機能を十分に果たすことができる。

3) 犬における完全遊離移植では血行再建は器械吻合器を用うると全く容易であったが、動脈硬化性変化の進んだ臨床例では動脈吻合の施行にはなお問題があり、手縫い法などを考慮すべきである。

論文審査の結果の要旨

松井は胃腸管完全遊離移植による高位食道欠損補填について研究した。まず犬を用いて胃の大弯側から作成された胃管遊離移植片に就ては採取後生食による灌流操作の是非が議論されているが、還流静脈血の酸素分圧に対するヒスタミン投与の影響などから判定すると灌流操作は A-V shunt の開存を存続せしめる結果有害無益であることがわかった。

また淋巴管や外来自律神経の切断が遊離移植胃管の術後遠隔時機能に及ぼす影響を有茎移植群を対照として検討したところ ^{32}P 局所クリアランスは移植後3カ月までは遊離移植群に於て高値を示すが6カ月後になると両群で差異をみとめず、一方移植片の内圧曲線から見た運動機能についても3カ月後には両群で差を認めず、eserin には終始よく反応することを知り、完全遊離移植片は代用食道としての機能を十分に発揮し得ることを示した。他方完全遊離腸管による頸部食道再建臨床例6例を経験し2例の長期生存例を得ているが、これらの移植に際し動脈硬化例が多いため動脈吻合は器械吻合よりも手縫い吻合を考慮すべきであると指摘した。

本論文は学術上有益であって医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。